神奈川県立横浜緑ケ丘高等学校

山手の範囲を定義する

1. 背景

学校の最寄り駅である山手駅は「山手」と名前につくが、元町・中華街駅周辺の西洋館が建ち並ぶ、実際に「山手」と地名につく地域よりも南にある。また、現在山手の範囲は定義されておらず、緑ケ丘高校の住所には山手と含まれていない。

2.目的(仮説)

本研究の目的は、地名として使われている山手が私たちの通うこの地域と離れたところにもある理由を知り、実際の山手の範囲を自分たちの視点で定義することである。

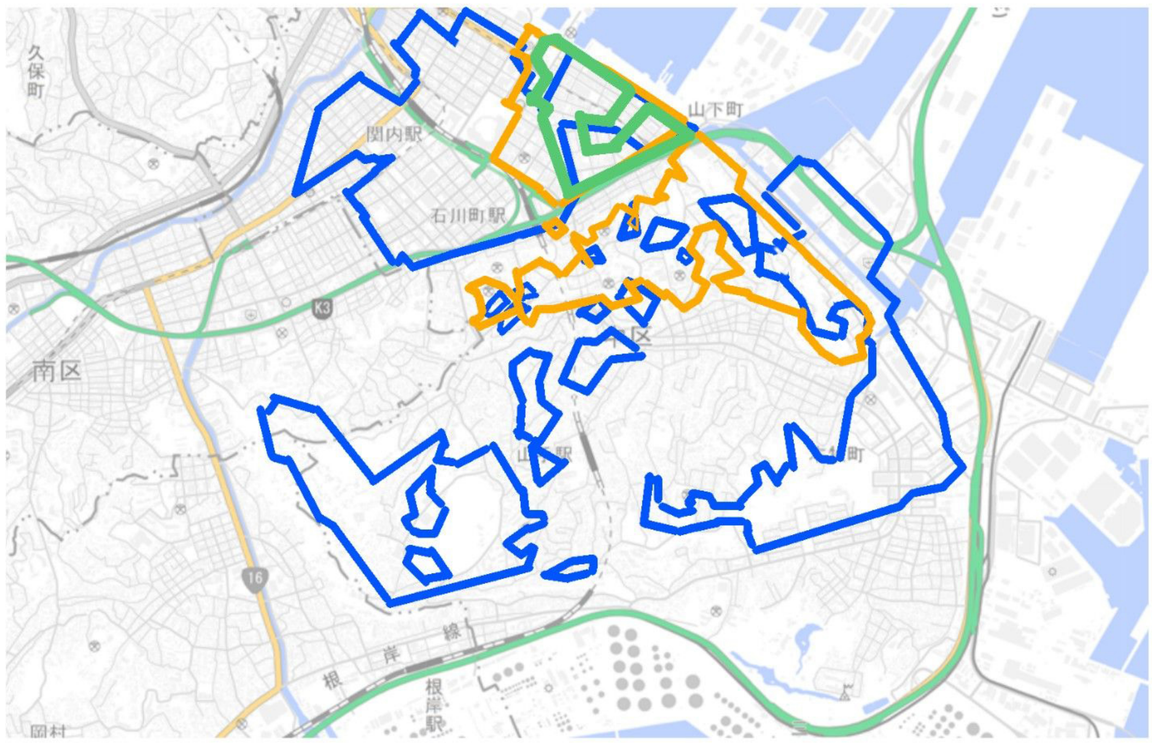
仮説として、首都高速道路湾岸線の内側にある中村川から南東の地域が山手とされると考えた。

3.過去の山手の範囲

かつての山手は、歴史的出来事の影響を受けてその範囲が変化し続けており、正確な定義がなされていいなかった。 そこで、私たちは各時代の地図や歴史的背景を踏まえ山手の範囲を定義した。

4.結果１

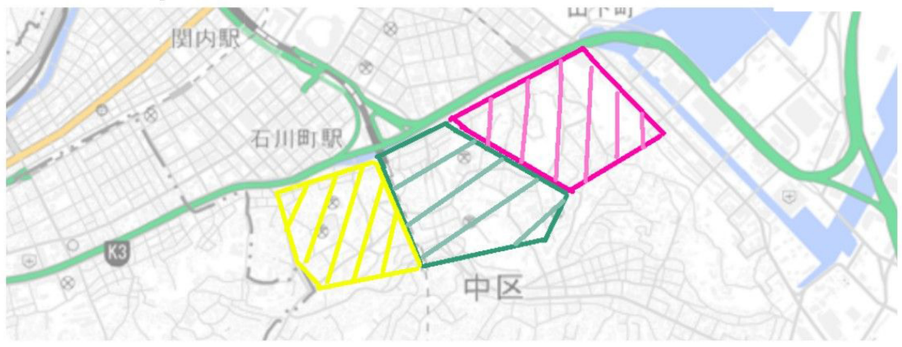
●1863年横浜居留地に英仏軍に駐屯
●1867年山手が居留地に編入
●1945年GHQの横浜接収範囲一部



5.現在の山手の範囲

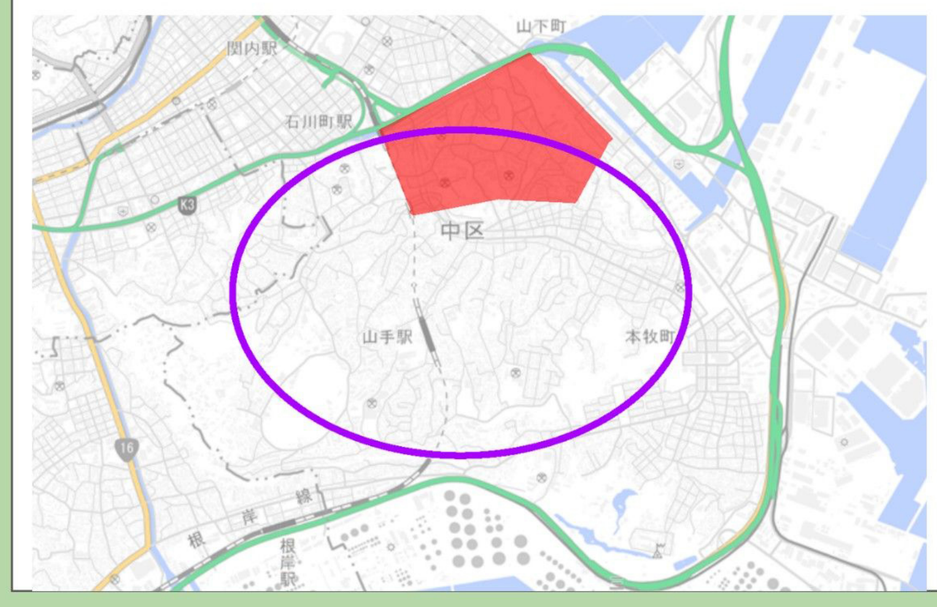
現在の山手は、都市開発や土地利用の変化、行政区分の再編などの影響を受け、その範囲が時代とともに変化していった。 本研究では我々が山手と認識している地域を現在の山手の範囲とした。

◎東部◎中部◎西部



6.結果2

●歴史的な山手 ●地理的な山手



●と●の共通範囲が◎と◎の大部分と重なる

7.考察

山手居留地は、初期の境界線が現在の地形とほぼ一致しているため、居留地の境界は当初から地形を基準として設定された可能性が高いと考えられる。
また、現在の山手には外国人居留地の拡大過程がそのまま引き継がれており、西洋館などの歴史的建造物や景観を基盤として成立した地域だと言える。

8.結論・今後の展望

本研究では、居留地の歴史や拡大過程、地形的特徴から山手を定義した。現在山手と呼ばれる地域は、ブラフ(断崖)が由来の地域と、横浜の山の手(港から山側にあったこと)が由来のJR山手駅付近だが、本研究の対象は居留地時代の歴史に関連した前者だ。今後は周辺地域との関係も含め、より広い視点から「山手」という地域の捉え方を検討していきたい。

9.参考文献

横浜開港資料館 「横浜の歴史のあれこれ Q&A」(2010年公益財団法人 横浜市ふるさと歴史財団)
横浜都市発展記念館「ようこそ！ 横浜地ワールドへ◎まちの移りかわりが見えてくる◎」（2017年 同上）
横浜開港資料館「横浜・地図にない場所ー消えたものから見えてくる、ハマの近代」（2017年同上）
地図中心「2015−１通巻508号」（2015年 日本地図センター） 半澤正時「横浜の町名」（1991年 横浜市市民局）
株式会社ウインダム「地図でたどる横濱」（2025年 株式会社有隣堂） 都道府県研究会「地図で読む本当にすごい神奈川」（2022年 株式会社宝島社）
中区制五〇周年記念事業実行委員会「横浜・中区」（1985年 中区制五〇周年記念事業実行委員会）